



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

April 25, 1996, No. 4

第2回総会および第1回研究会報告

代表

野田 研一 (金沢大学)

標記年次大会が1995年10月8日(日)午後から9日(月)午前にかけて、京都の光華女子大学の徳風館小講堂で開催された。第1日目は総会および懇親会、第2日目は初の研究会というスケジュールで行われた。

副代表

高田 賢一 (青山学院大学)

大神田 丈二 (山梨学院大学)

第1日目 総会

総会は出席者20名、委任状20名。会員80名中計40名の参加により、成立。高田賢一氏(副代表:青山学院大学)を議長として、以下のような議事が進められた。会議のもっとも大きな議題は4) - (6)の会則改定の部分であった。研究会という名称を学会という名称に変更したいという役員会からの提案の主な理由は、会員の勤務先における出張申請上の便宜および本会が行う助成金申請上の便宜の2点であった。変更理由については基本的に全会一致で了承されたが、名称そのものについては若干の議論があった。「文学・環境学会」という案と、「文学・環境研究学会」という2案が議論され、最終的には前者に落ち着いたが、今後も議論の余地のあることが併せて確認された。また、従来「談話会」と呼んでいたものは「研究会」とし、「研究会」は「大会」と呼称することとなった。以下、書記記録に基づいて議事内容の概略をご紹介します。

書記

土永 孝 (北海道大学)

会計

外岡 尚美 (青山学院大学)

成田 雅彦 (専修大学)

監事

平石 貴樹 (東京大学)

運営委員

宮下 雅年 (北海道大学)

石幡 直樹 (東北大学)

岡島 成行 (讀賣新聞)

中村 邦生 (大東文化大学)

笹田 直人 (宇都宮大学)

太田 雅孝 (大東文化大学)

朝比奈 緑 (慶應義塾大学)

村上 清敏 (金沢大学)

西村 頼男 (阪南大学)

伊藤 詔子 (広島大学)

木下 卓 (愛媛大学)

高橋 勤 (九州大学)

開会宣言および役員紹介 (野田氏)

議事

1) 1994年度活動報告 (野田氏・大神田氏)

2) 1994年度会計・監査報告 (外岡・成田氏、監査:平石氏)

1995年度予算案承認

3) 1995年度活動計画 (95-96年度) (野田氏)

4) 討議: 今後の課題

(1) 「日米環境文学シンポジウム」について (野田氏)

(2) 「日本のネイチャーライティング研究」分科会報告 (山里氏)

分科会幹事: 山里氏、副幹事: 高橋氏

委員: 外岡、生田、中村、高田、石井、木下、大神田、亀井、野田、岡島の各氏。

(3) 資料部の設置 (野田氏)

(4) 今後の談話会・研究会の開催予定と問題点 (野田氏)

(5) 学生連絡会の設置について (野田氏)

(6) 会則改訂について

a. 名称変更 (野田氏) 議論の結果、「ASLE-Japan/文学・環境研究会」を「ASLE-Japan/文学・環境学会」と変更することが決定された。

b. 役員任期の運用上の変更について (議長) 諸般の事情から総会の時期が初年度5月から今年度10月にずれ込んだ。来年度の総会がこのまま10月開催となり、役員任期(2年間)を総会単位で区切るとすれば、5ヵ月の実質延長となる。次回 総会時まで任期を延長することについて了解。

ニューズレター編集委員

大神田 丈二

石井 倫代 (芝浦工業大学)

会誌編集委員

上岡 克己 (高知大学)

山里 勝己 (琉球大学)

c. ニュースレター編集委員の増員について

会則第6条に「ニュースレター編集委員 2名」とあるのを、会誌編集委員数の記述にならって、「ニュースレター編集委員 若干名」に変更する。若干名とは4~5名という意味。

(7) その他

新規加入者の承認 (議長)

閉会宣言 (秋山氏)

記録 (書記: 土永孝)

第2日目 研究会

研究会は総会を上回る会員の参加によって盛況のうちに行われた。何よりも特筆すべきは、ASLE-Japan設立1年を経ずして、このようなアカデミックかつポレミックな研究発表の場を持ち得たこと、またこのような視点からの研究発表が日本ではおそらく初めてであろうことであった。それぞれの発表者は、ASLE-Japan設立以前から、それぞれにこのような領域への研究を進めておられた方々であるが、そうした個別的な営みをASLE-Japanが集合させる役割を果たし得たことは、何よりの成果であった。以下、プログラムを再録しておきたい。

大会 午前10:00~12:30

研究発表: 司会 山里勝己氏 (琉球大学)

- | | |
|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 10:00 - 10:30 | 結城正美氏 (広島大学大学院後期課程)
「Refugeにおける〈場所のエロティシズム〉」 |
| 10:35 - 11:05 | 赤嶺玲子氏 (前ネヴァダ大学大学院)
「自然とジェンダー」 |
| 11:15 - 11:45 | C. S. シュライナー氏 (C. S. Schreiner, 広島大学)
"Perversions of Pastoral in the Works of Raymond Carver and Paul Auster." |
| 11:50 - 12:20 | ブルース・アレン氏 (Bruce Allen, 順天堂大学)
"Of Geishas and Grizzlies II: On Traditions and Connections between Nature Writing in Japan and the U.S." |

* 総会・研究会を終えて—ASLE-Japan / 文学・環境学会代表 野田 研一

熊本での設立大会における胎動の不安に較べれば、京都大会の準備段階における気分は、いわばようやく一人歩きし始めた自立への不安と期待が相半ばするものでした。しかし、蓋を開けてみれば、予想を上回る盛況。総会における活潑な議論、研究発表の質の高さ、あるいは新たに参加された方々の顔、学生会員の参加など熊本では味わえなかった新たな要素が加わり、ようやくASLE-Japanの性格が形づくられつつあるのだという感を強くしました。とりわけ、研究発表は日本では初めての試みであることに改めて強い感慨を覚えます。今後、この分野での研究を展開しようとする者にとってこれはきわめて大きな激励であり基盤ともなります。記念すべき研究発表を行って下さった4名の方々に心からの謝意を表します。また、すべての研究発表に関する司会を引き受けて下さった山里勝己氏にもお礼を申し上げます。そして活潑な質疑応答に参加して下さったすべての会員の皆さんにも。

京都大会開催に当たっては、会場の準備から懇親会に到るまで全般にわたって光華女子大学の岩田強氏のご助力を

得ました。ほんとうに申し訳ないほどきめの細かいご配慮をいただきました。この場を借りて改めてお礼を申し上げます。また、宿舎の手配その他について、やはり地元の西村頼男氏 (阪南大学) のご協力を得ました。今後も、さまざまな場所で総会および大会を開催することになりますが、開催地の方々には運営上、さまざまなご助力を願わねばなりません。どうぞよろしくお礼申し上げます。なお、役員あるいは事務局として力及ばず、反省すべき点多々あったことを銘記しておきたいと思えます。とくに役員の仕事の十分な組織化が成し得ず、その分、開催地の方々に負担をおかけしました。今後は大会運営にかかわるプログラム実行委員会を早期に組織して、開催地の方々と協力および分担態勢を強化して行きたいと思えます。

最後に、総会でも提起されましたが、大会のありかたについてはさまざまな工夫の余地があるかと思えます。ASLE-Japan / 文学・環境学会にふさわしい大会を皆さんのアイデアを結集して構想していきたいと思えます。どうぞ忌憚ないご意見、ご提案をお願いします。

パトリック・マーフィ教授(Professor Patrick Murphy) 講演会日程

沖 縄

- 5月2日(木) 講演 「アメリカン・ネイチャーライティングをめぐって」
(Lecture on American Nature Writing)
場所：琉球大学法文学部
- 5月3日(金) 講演 「アメリカの大学における英文科カリキュラムの変化について」
(Lecture on Changes in Curriculum in English in American Universities)
場所：琉球大学法文学部
- 5月6日(月) 講演 「アメリカ文化とアメリカ社会における文化的多元主義」
(Lecture on Multiculturalism in American Literature and Society)
場所：琉球大学法文学部
- 5月7日(火) 講演 「アメリカの大学院について」
(Lecture on American Graduate School)
場所：琉球大学法文学部

* 沖縄地区のお問い合わせは、琉球大学法文学部 山里勝己氏 まで。

名古屋

- 5月9日(木) 講演 「アメリカの大学におけるカリキュラム改革」
("Curriculum Reform in the United States: Models, Problems, and Prospects for Japan")
場所：名古屋アメリカン・センター

* 参加ご希望の方は直接名古屋アメリカン・センター (Tel: 052-581-8631)にお問い合わせ下さい。

広 島

- 5月10日(金)～5月11日(土)
詳細は別掲案内 [p.5] をご覧下さい。

東京および近郊

- 5月24日(金)
青山学院大学(厚木キャンパス) 講演 11:00-12:20 p.m.
「アメリカン・ネイチャーライティング入門」
("Introduction to American Nature Writing") 学部1～2年生対象
フェリス女学院大学 講演 3:30-5:00 p.m.
「アメリカン・ネイチャーライティング入門」
("Introduction to American Nature Writing") 学部1～4年生対象
- 5月26日(日) ASLE-Japan/文学・環境学会 講演(青山学院大学総研ビル3F 第10会議室)
「環境文学ーネイチャーライティングとノンフィクションのフィクション性を越えて」
(Environmental Literature: Beyond Nature Writing and the Fiction of Nonfictionality)
ASLE-Japan/文学・環境学会主催 (詳細は別掲案内 [p.4] をご覧下さい。)

* 東京地区のお問い合わせは、青山学院大学文学部 高田賢一氏 まで。

ASLE-Japan 1996年度研究・講演会 開催のお知らせ

新年度第一回目の研究会を下記の要領で開催いたします。今回は講師としてパトリック・マーフィ氏 (Patrick D. Murphy: Indiana University of Pennsylvania)をお招きします。マーフィ氏はその著*Literature, Nature, and Other: Ecofeminist Critiques* (State University of New York Press, 1995)でエコクリティシズムおよびエコフェミニズムの理論家として脚光を浴びている研究者であり、またASLE-U.S.の機関誌*ISLE*の前編集主幹として活躍すると同時に、この間の文学と環境をめぐる議論において中心的な役割を果たして来た気鋭の学者です。

ASLE-Japanも参画するプロジェクトとして現在進行中の*Literature and Environment: A Handbook*の編者でもあり、今後もマーフィ氏を中心としたさまざまなプロジェクトが構想されています。エコクリティシズムの理論的最前線、アメリカのネイチャーライティングの現状などに関心をお持ちの方は、ぜひご参加下さい。なお、同氏はこのほかにも来日期間中、南は沖縄から広島、名古屋、東京など各地で講演を行う予定です。詳細は別掲スケジュールをご覧ください。

日時：5月26日(日) 午前11時～12時30分

場所：青山学院大学 総研ビル3F 第10会議室 (総研ビルは青山学院大学正門を入ってすぐ右側)
"Environmental Literature: Beyond Nature Writing and the Fiction of Nonfictionality"

終了後、午後1時～3時までの予定で、歓迎会および懇親会を開催いたします。

場所：青学会館

時間：午後1時～3時 会費：¥4,000

*参加ご希望の方は、別紙出欠表を5月20日までに下記宛てご返送下さい。

高田賢一 (ASLE-Japan副代表)

>>>>> 今後の行事予定 <<<<<<

5月26日	東京 研究会—パトリック・マーフィ氏 (ISLE前編集長) 講演会
8月初旬	富山/京都 シンポジウム—ゲアリー・スナイダー氏 (詩人)
8月13日～17日	ハワイ ASLEハワイシンポジウム
9月下旬	京都 研究会—ローレンス・ビュエル氏 (ハーヴァード大学) 講演会 (交渉中)
10月6日～7日	札幌 ASLE-Japan/文学・環境学会年次大会 (札幌大学)

*詳細は追って通知いたします。



1996年度春季研究会および役員会

【報告】

3月9日(土) 春季研究会(午後1時30分より)、および役員会(3時30分より)を青山学院大学で合併開催しました。主な内容は次のとおりです。

春季研究会

1) *Environmental Literature: An International Handbook*, 執筆打ち合わせ

山里勝己氏の報告にしたがって、主に執筆内容、執筆者の検討を行いました。詳細は「日本のネイチャーライティング研究分科会」報告をご覧ください。

2) ハワイ・シンポジウム/プログラムについて

野田研一氏の報告にしたがって、日米の参加者の確認、およびプログラム内容の検討を行いました。日米双方からそれぞれ約20名の参加が見込まれています。また招待作家の人も進んでいます。プログラム内容に関して、さまざまな具体的提言がなされました。主な提言は以下のとおりです。

- 1) 現代フィクション作家のうち、翻訳に値する作家として日野啓三、池澤夏樹などを採り上げる。
- 2) 石牟礼道子に関する研究発表が多いのでまとめて一つのセッションとする。
- 3) 日米の〈自然〉概念の差異を討議する。併せて、

自然保護運動のありかたの違いも検討する。

4) アメリカのネイチャーライティングの日本への影響、とりわけ日本におけるソロー受容についてセッションを設ける。

5) 日米双方に具体的ななかかわり、ゆかりのある作家を採り上げる。たとえば、滞日経験もあり、宮沢賢治の翻訳もあるゲーリー・スナイダー。

6) 環境教育のプログラムを設ける。

【役員会】

主な議題は次のとおり。

1) ハワイ・シンポジウム/プログラムについて

- ・招待作家の人数を岡島氏、日野啓三氏に依頼。
- ・補助金の申請を岡島氏を中心に検討中。
- ・航空券の手配を一括して「マップ・インターナショナル」に依頼。

2) 本年度行事について(別掲案内参照)

3) 役員改選について(別掲案内参照)

4) 会誌刊行について

1996年度刊行を目標に計画を進める。

5) ニューズレター第4号について

6) その他

中・四国地区 研究会、講演会、勉強会へのお誘い

パトリック・マーフィ教授の来日に伴い、中・四国地区では研究会と講演会を予定しています。奮ってご出席下さい。

研究会 日 時：1996年5月10日(金) 15:00~17:00

場 所：広島大学総合科学部 A423

テーマ：エコフェニズム、序論と現状分析

歓迎夕食会：17:30からウッドハウス(フランス料理)

JR八本松駅近く 会費3000円程度

講演会 日 時：1996年5月11日(土) 10:00~12:00

場 所：アステールプラザ中会議室

テーマ：エコクリティシズムとポストモダニズム

主 催：中四国アメリカ文学会

上記参加希望者は5月5日までに、伊藤詔子

までご連絡下さい。

*これを機会にエコフェニズムについての勉強会を始める予定です。手始めに読書会から始め第1回を6月中に開催したいと考えています。

テキスト：Judith Plant ed., *Healing the Wounds: The Promise of Ecofeminism*, Green Print, 1989

参加希望者は5月末までに伊藤までご連絡下さい。日程を調整後連絡します。なおテキストは各自入手して頂くか(出版元：The Merlin Press, 10 Maklen Road, London NW53HR, paper £7.99)、ご希望によりコピーをしますのであわせてご連絡下さい。

シラバス紹介

愛媛大学 1995年度総合科目授業計画

授業科目名 (単位数)	総合科目DVI (2)
講義題目	〈自然〉を解説する
担当代表者	木下 卓
曜日時限	火 3
講義要旨	わたしたちが〈自然〉について論じるとき、それはあるがままの自然ではなく、ある程度の抽象性をともなった文化としての〈自然〉という様相を帯びざるをえない。学問や文化のそれぞれの領域からとらえられるさまざまな〈自然〉に触れながら、〈自然〉相互間の差異やずれを認識し、文化としての〈自然〉の全体像を創り上げてゆく。

日 程	担 当 者	所 属	講 義 内 容
1 10月17日	木下 卓	教養部	イントロダクション
2 10月24日	池田 忠生	教養部	古代ギリシア人の自然観をその歴史的な背景
3 10月31日	黒木 幹夫	教養部	東洋における自然観の特徴
4 11月 7日	福岡 正信	無 職	自然農法をとおして見た〈自然〉
5 11月14日	川端善一郎	農学部	環境としての〈自然〉
6 11月21日	日原 冬生	教養部	甦った遺伝子—生物学の視点から—
7 11月28日	上田 紀行	教養部	〈自然〉と文化—文化人類学の視点から—
8 12月 5日	木下 卓	教養部	性における〈自然〉とは—ガイ・カルチャーについて—
9 12月12日	松久 勝利	教養部	ピュシスの表象—西洋美術における〈自然〉の問題—
10 12月19日	宇和川耕一	教養部	書かれた〈自然〉の変遷—ドイツ文学から—
11 1月 9日	小西 永倫	教養部	イギリス文学と〈自然〉—ロマン派以降—
12 1月16日	望月佳重子	教養部	アメリカ先住民の〈自然〉観
13 1月23日	木下 卓	教養部	〈自然〉というジャンル—アメリカン・ネイチャーライティング—
14 1月30日	加藤 好文	教養部	アメリカ南部の〈自然〉観
	木下 卓	教養部	総括

Scott H. Slovic, Terrell F. Dixon編著*Being in the World: An Environmental Reader for Writers* (Macmillan, 1993)が4冊、上智大学の秋山健先生のところにあります。本書はネイチャーライティング研究の基本図書の一冊で、裏表紙には以下のような紹介文が載っています。

Being in the World: An Environmental Reader for Writers is a thematically organized composition reader derived from the assumption that, as John Muir once put it, "most people are *on* the world, not *in* it." The text's four-part organization suggests an evolving human relationship to the natural world. This text includes:

- Eighty-three selections of essays, letters, and journal entries by authors ranging from Edward Abbey to Ann Zwinger and including such diverse and exciting writers as Gloria Anzaldua, Wendell Berry, Sandra Cisneros, Annie Dillard, Gretel Ehrlich, Robert Finch, Stephen Jay Gould, and Eddy L. Harris. Multiple selections by ten of the anthologized authors are provided.
- Substantial chapter introductions; biographical/critical headnotes, many based on interviews with the authors; topics for discussion and writing; and selected bibliographies.
- Color reproductions of three landscape paintings and one photograph with discussion and writing topics.
- Glossary of critical terms commonly used in discussing nature writing.

From the Foreword by Senator Gaylord Nelson, the Founder of Earth Day: "A writing textbook like *Being in the World: An Environmental Reader for Writers* offers students many ways of developing skills as writers and thinkers. But just as importantly, I think, it helps to focus attention on how human beings live on—or 'in'—the world, an issue that will determine what kind of world future generations will inherit."

ご入用の方は秋山先生にご照会下さい。

なお、アメ

リカのネイチャーライターの朗読テープも数点あるそうですので、関心のある方は合わせてお問い合わせ下さい。

現代ネイチャーライターの横顔 (4)

森の女アン・ラバスティール

上岡克己



アン・ラバスティールに初めて接したのは、Robert F. Sayre ed. *New Essays on Walden* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992)に収められてある彼女のエッセイ "Fishing in the Sky"であった。このエッセイを通して、彼女がウィルダネスの色濃く残る広大なアディロンダック山中のある湖の畔に木屋を建て、独りでソロー的生活を営んでいることを知った。彼女は "female Thoreau" としばしば形容されているがソローは著書の中で女性に関してほとんど語ることがなかったので、彼女を知るまでソローと女性はどうあっても結びつかないという先入観があった。しかしその偏見は彼女を知って以来捨ててしまった。

実際のところ、ソローの『日記』の記述の中に、ソローが自然を愛する女性について言及した一節があることを教えられた——「私はこれほど自然を愛する若い女性を聞いたことがなかった。彼女は寂しい荒れ果てた地に行き、独りで住むという。彼女は『自由に生きれる』と考えている。私は彼

女の計画を知って嬉しい。」(1857年4月23日)

それにしても、女性独りのウィルダネスの生活とはどういうものだろうか？ 処女作『森の女』はその一部始終を語ってくれる。彼女の生き方は、多分に自主独立精神を謳歌するアウトドア・ライフのひとつであり、アメリカ人の好みそうな話である。しかし彼女は単なる記録作家に甘んじることなく、世間の偏見や差別の中で女性としての自己定義を試みる。

続編『ブラックベア湖を越えて』ではアディロンダック州立公園に侵入してくる様々な開発や汚染(酸性雨や核廃棄物)に目を向ける。彼女の環境意識がますます研ぎ澄まされ、もちまへのヴァイタリティが抗議運動へと促す。もっともすべてが深刻な話題に限定されるわけではなく、森の生活の喜びにも多くのページが費やされている。彼女の森の生活はソローのような禁欲的ではなく、性に関しては極めておおらかである。といてだれが彼女を俗物と解せようか？

優秀なエコロジストとしての観察記録が『絶滅した水鳥の湖』に結晶している。グアテマラに生息していたポックという水鳥の絶滅についての美しくも悲しい話であり、その背後に我々ホモ・サピエンスという種の傲慢な生き方が問われているのである。アン・ラバスティールは「簡素な生活・高き想い」の生活を送る一方で、生態学的良心に則り、環境破壊に対して警告を発し続けている。

アン・ラバスティール(Ann LaBastille)は1938年、ニューヨークで生まれる。コーネル大学で博士号取得。野生生物生態学者。1965年からアディロンダック州立公園内に居をかまえ、独りで生活をする。1985年からはさらに奥地にある小さな湖の畔に木屋を建て、「ソロー二世」と命名し、現在もそこで森の生活を続けている。主要著書として次がある。

Woodswoman(1976)

Women and Wilderness(1980)

(『自然と共に生きる女たち』晶文社、中村風子訳、1987年)

Beyond Black Bear Lake(1987)

Mama Poc: An Ecologist's Account of the Extinction of a Species(1990)

Bulletin Board

●『ユリイカ』3月号(青土社)

同誌3月号が特集「ネイチャーライティング」を組んでいる。5人のネイチャーライターの最近の話題作を巻頭に、ロレンス・ビュエル、スコット・スロヴィックの問題提起に富む論考のほか、95年度日本英文学会のシンポジウム・パネルであった志村正雄、荒このみ、佐藤良明氏の各論考、それにASLE-Japanから伊藤詔子、笹田直人、野田研一各氏が論考を寄せている。また巽孝之、今福龍太両氏による徹底討論「ウォールデンの浜辺で—ネイチャーライティングを解放する」は、アメリカのネイチャーライティングというジャンルを自然派や特定の趣味・指向の閉域に封じ込めることなく、アメリカ文学やアメリカ文化、あるいはさらに大きな文脈の中でと

らえようとする挑発的な議論が展開されている。さらにASLE-Japan会員の分担執筆による、山里勝己編「ネイチャーライティング・キーワード集」、高田賢一編「アメリカン・ネイチャーライティング・ブックガイド30」は、今後ネイチャーライティングというジャンルがより広範に共有されるための重要な役割をはたしてくれるだろう。『フォリオa』2号、『英語青年』以来、久々の本格的な雑誌特集は、ネイチャーライティングの今後の動向のみならず、エコクリティシズムへの大きな足がかりを提示している。

●『アメリカ文学の〈自然〉を読む』(ミネルヴァ書房) スコット・スロヴィック、野田研一編『アメリカ文学の〈自然〉を読む—ネイチャーライティングの(8ページに続く)

鈴木大拙の「エマソン論」は、正確には「エマーソンの禅学論」（『禅宗』第14号、鈴木大拙全集所収・和文）と題され、明治29年（1896年）に書かれている。エマソンからの引用は主に The Over-Soul からであるが、他に Circles, Self-reliance また L.D.S. と略されるものからの引用も数カ所ある。当時26歳の大拙はまだ渡米前であったが、すでに先に渡米していた師匠の釈宗演氏の講演原稿の英訳の仕事を手伝うほか、師匠の示唆のもと「新宗教論」なる著作もあった。大拙はこの歳までに学業の傍ら、積極的に禅の修行を行い、禅に対するかなりの知見を得ていたと思われるが、同時に維新以来日本に紹介されてきた西洋の文献にも興味を示し、哲学書等も広く読書していたとされている。

大拙はエマソンが「直覚的真理の存在を認め、その求めるところが、禅の思想の持つ不立文字・教外別伝・見性成仏によるさとりの道筋と大いに一致していることを論ずる。それは単に禅との類似点・共通点を挙げるのではなく、むしろ大拙自身が真にエマソンの思索に共感の意を持ち、その共感の意と大拙が禅に対して抱く共感との共有点を淡々と語るものである。大拙は冒頭部分で「彼（エマソン）は禅を説くものなり、少なくとも禅的修養を説くものなり」とまで言いきっている。

大拙はまず、「The Over-Soul」の中から禅の「不立文字」に共通する部分を引用する。「言語文字の答は詐なり、汝が求むる所は実に言詮を離る」（An answer in words is delusive; it is really no answer to the questions you ask.）「不立文字」は、真理は文字に表せず概念では規定できないとする思想である。大拙は人間社会における言語の貢献度を大いに認めた上で、その言語による束縛が、求めているものを見えなくするというエマソンの指摘を、その著書の中から拾い上げる。言語・概念によって真理に到達できないという視点から、「たとえ聖賢の言葉であっても自らそれを真と認めないのならば信ずる価値がない」（L.D.S.）とのエマソンの主張に賛同するのである。

禅の悟りは、他人から教示された概念によって得ることができるのではなく、自らの禅的体験によってのみ得ることができる。大拙はそれを「吾自ら之を見て之を了するにあるのみ」と表現している。エマソンの語る真理も「それを見たときのみ真理とわかる」ものである。それはあたかも自分が目覚めているときに自分が目覚めていることを知覚できるよ

うなものである(The Over-Soul) とエマソンは語る。したがって真理（もしくは神）は外に向かって求めるものではなく、自分の内側に向かって求めるべきものである。ゆえに神の語る所を知ろうと思ったら、「汝の密室に入りて門戸を鎖ざす(go into his closet and shut the door)」が必要になる。自らの周囲の社会的環境をすべて遮断することによって、はじめて自分の中にある神の言葉・真理（悟り）を体験することができるのである。

このように、禅とエマソンに共通するものはいわば自己の理性判断・直観への絶対的信頼である。しかし、禅はさらに理性の真理に対する直覚性には、現実社会における自己判断の否定が伴うものであるとする。「まづ死せよ、先ず忘れよ」と説く禅は、自分の記憶も自分の環境のひとつであるとして、その記憶を消し去ることにその修行が始まるとされる。大拙はこの点においても、エマソンの思索に抜かりがないことを「Circles」からの引用で証明している。「此に吾曹が切に得んことを望んで止まざる一事あり、即ち吾我を忘るることは是なり、常軌の外に出でて自ら驚くことは是なり、無量劫来の記憶を失却することは是なり。」(The one thing which we seek with insatiable desire is to forget ourselves, to be surprised out of our propriety, to lose our sempiternal memory ...)この境地に至ってはじめて、「個人的霊体(the individual soul)」と「宇宙的霊体(the universal soul)」が融合する準備ができあがるのである。

鈴木大拙のエマソン論

松原郁男

さて、このように禅学者大拙がエマソンに対して覚える共感にけっして偶然のものとは考えられない。それは、エマソンのコンコードにおけるヨーガ行への傾倒や、インド諸宗教典の読書に起因していると思わざるをえない。たとえば「Circles」の中に語られるように「自己を忘れ去り、日常の妥当性を脱し、無限の（無始以来の）記憶を捨て去ること」を求めるのは、禅思想の祖先とも言うべきインドヨーガ学派の基本思想である。

大拙は、「今後も西洋の文学の中で禅的な要素を持っているものを紹介し、また禅が世界に向かって伝言すべき希有の思想であることも論じてゆきたい」として、このエマソン論を閉じている。しかし大拙は現実にはこのエマソン論を書いた翌年から11年間の渡米生活に入り、その生涯はもっぱら禅思想の海外への紹介、翻訳に費やされることになる。

世界へ』(Scott Slovic and Ken-ichi Noda, eds. *Environmental Approaches to American Literature: Toward the World of Nature Writing*. Minerva Press, Spring, 1996) が4月下旬ミネルヴァ書房より刊行される。〈自然という文化〉をキーワードにした19編の論考から成る論文集。

第1部 アメリカ文化と自然環境

第2部 アメリカ文学と自然—1900年以前

第3部 現代アメリカの環境文学を読む

ASLE-Japan設立以前の準備会段階にすでにスタートした企画

であったが、ネイチャーライティングへの関心が徐々に高まる中、着々と構想から編集までの作業が続けられていた。執筆陣はASLE-JapanおよびASLE-U.S.から参画し、訳者もASLE-Japanのメンバーである。ネイチャーライティングを中心としたここ数年間にわたるさまざまな展開の一つの里程標を成す論文集であると同時に、次のステップへの方向をおのずと提示する論文集でもあるだろう。

(13ページに続く)

「日本のネイチャーライティング」のための一つの試論

— 国語科の教材を通して —

亀井 浩次

高校の国語科教員という立場で、どのように「環境」の問題を扱えるかという試みの中から、昨年、環境関連の文学教材のリストを作成しました（「第6回日本環境教育学会大会」にて発表）。直接「日本のネイチャーライティング」の研究をめざしたものではありませんが、応用できそうな部分もあり、とりあえず話題提供ということで報告します。

まず、リストの概要についての説明ですが、現在高校で使用されている（文部省の「検定」が済んでいる）国語科の教科書64冊（1994年時点。現在はもう少し追加されている模様）の中から、「環境」に関連した題材を扱った教材をリストアップしたもので、計164教材という結果になりました。この作業を行っていく上で重要な問題となったのは、選択の際の視点・基準をどこにおくか、という点でした。単なる自然描写ということであれば、ほとんどすべての教材が対象となってきます。そこで、基本的な姿勢としては「環境に対する問題意識、および問題解決のための意欲につながるような方向性をもつ」ことを重視し、その上で①自然界のさまざまな事物・現象などを直接題材としたもの、②野外活動や地域社会の中での「自然とかかわる人間」を題材としたもの、③伝統文化・先住民文化などとの比較から現代の社会を考え直すことをテーマとしたもの、の3つの条件を設定し、いずれかに該当するもの、ということで選定を行いました。①②③それぞれの分類について、若干の実例をあげてみます。

- ①『えぞ松の更新』 幸田文
『最後の一羽』 池澤夏樹
『夢見る雑草たち』 加藤幸子
『一滴の水から』 立松和平
『鳥にも自然の分け前がある』 荒垣秀雄
『「生命の物語」を読む』 中村桂子
『動物学から学ぶこと』 中川士郎
- ②『自然との触れ合い』 長谷川恒男
『千三百年のヒノキ』 西岡常一
『北極点単独行』 植村直己
『梶田富五郎翁を訪ねて』 宮本常一
『晴耕雨読～深沢七郎氏に聞く～』 開高健
- ③『日本人の自然観』 河合雅雄
『祖父から孫へ—文化の伝承』 高田宏
『水は天から貰い水』 富山和子
『TREE』 C. W. ニコル
『山里の変化といわなの保護について』 内山節
『繁栄の現在・窮乏の未来』 加藤尚武

作品名だけで内容を紹介するスペースがないのが残念ですが、比較的良好に知られた著者のものをあげてみました。ある程度の雰囲気は伝わるのではないかと思います。もちろん、①②③の分類は便宜的なものであって、①③両方の要素を持った作

品など、この分類ではとらえきれないものもあり、また、例えば③などはかなり拡大した解釈も可能であって、境界のつけかたが明確にできない、といった問題もあります。もう少し整理したほうがよいという気がしています。

さて、「日本のネイチャーライティング」研究への応用ですが、とりあえずは、視点を明確にするための手がかりとして考えられるのではないかと思います。例にあげた作品だけでも、随筆的なものを中心に、記録や解説のようなノンフィクション、評論、また小説までさまざまなスタイルの文章があり、それぞれを比較することにより、例えば、「文学」として考えるための基準の設定や、著者の「自然」に対する姿勢の取り方、問題意識の持ち方など、全体的な傾向のようなものが少しは整理されてくるのではないのでしょうか。

現在、「日本のネイチャーライティング」研究の一番大きな問題は、定義の確立、共通認識としての基準づくりであろうと思われまます。アメリカ文学の中での定義はあるものの、文学事情の異なる日本でそのまま当てはめるわけにもいかず、また日本文学の中で利用できそうな既製の概念があるわけでもないため、新たな枠組みを考えなければならないということになります。結局のところ、多くの作品に当たりながら帰納的に大枠を考え、それを土台にして細部を検討してゆくという方法が最もよいのではないかと気がしています。

先にあげた作品例の中で気づかれたかもしれませんが、このリストはいわゆる「現代文」に限定してあります。現在の国語科教育の事情によるものですが、「ネイチャーライティング」研究として考えると、古典作品の扱いの問題は避けられないものがあります。「古典」といっても、『万葉集』から『枕草子』、また西行（個人的にはネイチャーライターとして考えた）の作品など、同じように自然を題材としていても作者の意識には大きな隔たりが見られ、一口に「古典」という枠だけで論じるわけにはいかないように思われます。さらに言えば、日本文化に常に影響を与え続けてきた中国文化—老荘思想や田園詩人なども含めて考えるべきかも知れず、まだまだ膨大な研究テーマが残されているといえそうです。

「日本のネイチャーライティング」を研究したいと思いがら、まだ入り口のところに手をかけたばかりというのが実感です。もう少しまとまったものができればいざ報告したく思っています。とりあえずその入り口の手がかりとしてリストをご紹介します。リストの内容等、もう少し詳しく知りたいというご希望などありましたらご連絡ください。

[連絡先] 名古屋市立若宮商業高校 国語科 亀井浩次

追記：現在、アメリカの環境教育プログラム“Project Learning Tree”のテキストの翻訳（英語→日本語）ボランティアを募集しています。ご協力いただける方は上記連絡先までご一報ください。

時を繕う

ブルース・アレン

近江 満里子訳

先日、古いズボンを繕っていたときに、ある考えがぼくの頭に浮かんできた。

でもちょっと待ってほしい。なんで針仕事なんかをしていたのだった？ 針仕事は男のやることではないし、なによりも今日の忙しい人間のやる仕事からは、あまりにかけ離れている。針仕事ほど非経済的で、必要性もなければおもしろくもないものはないだろう。

たしかにその通り。でもぼくはこのズボンが気に入っているのだ。十五年近くはいているから、しっくりなじんでいるし、個性もある。なんともいえない「質」感もある。いつも身近にあって、こんなに長もちしたんだから、少しひいき目に見てもいいだろう。とにかく気に入っているのだから。

まあ、好きなんだということにしておこう。でも実はそれ以上のことがあるような気がする。針仕事をしていると、思ってもみなかったことが起きるらしい。針仕事を通して、はっきり何とは言えないのだが、何かしら確固たるものに引きつけられるのだ。それが良いものであることをぼくは信じている。ある種の思想、あるいは存在と言えるもの。そうしょっちゅうは体験できない。でも、何かを示しているとはぼくには思えるのだ。

ぼくは、まめに針仕事をするわけではない。だから、うまくないし、自己流だ。針仕事自体が先生だった。何にもまして、針仕事によってぼくは「質」というものにじかに接する。昨今ではとてもまれなできごとである。針仕事が、ぼくを服に集中させる。一インチごととまた一センチごとに、ぼくはものごとの本質に引きつけられていく。今になって不思議に思うのは、なぜ特にこのズボンのよさがわかったのだろうかということだ。なぜこの十四年間に特別なものになったのだろうか。柔らかいけれどこんなに保ったのはどうしてか。確かに縁が少しすり切れ、ポケットの入り口は幾針か繕う必要がある。でもまだまだしっかりしている。このズボンにはずっと愛着を持ってきた。以前はジョギング用として使ったこともあったが。最近、キャンプで一日の終わりにくか、室内用に使っている。今では、過激な扱いをしないように、前よりも気をつけるようにしている。ずっともたせたいから。もっと学べることがあるのでは、とさえ思っている。

このズボンは、最初はそれほど信頼がおけるものには見えなかった。スポーツ用品店で半端ものになり、バーゲン・セールに出されたのだろう。安物である。最新のスポーツ・ウェア界好みの派手さにも欠けている。だから買った時は、あまり期待はしていなかった。でも驚いた。できがしっかりしていたのだ。材質は木綿で、他と比べて一番薄地だが緻密に織られていた。軽くてはいている感じがしない。それに柔らかい。キャンプの本によると、木綿はアウトドア用品としては、避けた方がいいらしい。保温は悪いし、乾きにくいからというのだ。でも

このズボンといえば、呼吸をしているかのように、しかも風を遮るから暖かく、新しい合成繊維のようにさらさらしている。売れ残ってはんばものになったのは、見栄えがしないからではないだろうか。それにひきかえ、すごくスマートで鮮やかな色彩の——エリート版といったところか——キュッキュッと音をたてるナイロン製が売れていたのだ。

ぼくは針仕事は苦手だ。しょっちゅう急いでしまう。他の場合もそうなのだが。痛い！またやった。針仕事をしている時は、慌ててはいけな——たちどころにそう教えてくれる。よくあせってしまうが、それはまずい。あせれば——痛い！と、すぐこうなる。だからいやでも針目に集中せざるをえない。ぼくが急いでしまうのは、自分が時間をむだにしているのではないかと思いついた時なのだ。いろいろな考えが、頼まれもしないのにまた頭に浮かんでくる。他にすることがあるのではないか？ 授業の準備は？ 書き物は？ 請求書はどうした？ まったく、またやってしまった！

針仕事は、ぼくを布地へと向き直らせる。というか、戻らせてくれる。布地と針が融合し、一つになる。うまく縫えた時にはの話だが。毎日針を持ちたいとは思わないし、そうたびたびでも困る。でも今みたいな時には、禅の瞑想よりいいかもしれない。やってみるといい。集中力がなくなっても、思い乱れても、禅僧から頭に一発もらう気づかいはない。この人を裏切らぬ針を手をしているのだから。快調の時は、より奥深いところへぼくを導いてくれる。そうでない時も、少なくとも目標は見える。ぼくの手——もう一人のパートナー——にとっても嬉しい話だ。なんで嬉しいかといえば、自分の軟弱な都会暮らしにもかかわらず、今でも指にはしっかりタコが残っていて、針先を感じるだけで、針と布を扱えるからだ。あたかも、盲人なのに、ものが見えるかのよう。針先の感触を妨げるような指ぬきには用はない。皮膚の方が役立つし、しっかりタコができていれば足りる。そして針。柔らかい布地の間を貫いていくのがわかる。最高のものはみんなそうだが、まさに感覚的だ。針はぼくに教えてくれる。禅僧が矢的的とが一体化するというのはこういうことではないか。もしかしたら、公案よりもっといいかもしれない。このズボンの布地について考えてみる。なぜ特にこのズボンがよくできていたのだろうか。商標には「ブラジル製」とかいてある。それは確かに合理的な判断だ。ズボンは「悟り」の産物ではない。が、役にたつのだ。本質的なものなのだ。それによってぼくは、この服に、そしてぼく自身に引きつけられ、ぼく自身の自我を超えるのだから。

どうしたら人生の本質を見つけられるだろう。服の本質の中に？ 良い素材——物質主義の産物ではなく、必需品であり、昔ながらの味わい深いもの。特に本質と生命が感じられる服を思うと、ぼくはそれをじょうずに使いたくなる。そういうズボンを着ていると、歩き方も違ってくるのに気がつく。その存在を意識するようになる。流行の服だと汚してしまうのではと心配になるが、服のもつ生命を意識するようになり、それを大切にしたいくなるのだ。長く残るものを探し、見いだす、ということなのだ。

ぼくはそうしょっちゅうは針仕事をするわけではない。時たま針を持つのが好きなのだ。というのも、つまり何か実際に

Responsibility Beyond Reason

C. S. Schreiner, Hiroshima University

"The warning is clear," Luc Ferry says in his prize-winning book *The New Ecological Order*. "The by-passing of humanism in favor of the vegetable and animal kingdom in matters of ethics and law will not occur without coercion."

Luc Ferry is disturbed by the inhumanist theses of fundamental ecology. He worries that giving the same legal rights to humans, owls, trees and stones will lead to the kind of tyranny which characterized Nazism. Ferry worries that the new zealots of nature—from deep ecologists to Greenpeace members to ecofeminists—will reverse the principles of the Enlightenment which have promoted human freedom and reason.

Members of ASLE may be interested in this philosophi-

cal controversy. They can judge if Luc Ferry's warning is clear. Modern philosophy supports a concept of human right which is now disturbed and challenged by the demands of ecological awareness and action.

Order and Critical Agency

Luc Ferry is a French philosopher, and his use of the term "ordre" in his original title *Le nouvel ordre éologique* indicates the position he will take. "Ordre" has an imperative sense. It refers to a disciplinary order, set of rules or legally binding framework, community of sense.

The present "order" as determined by the largest economic powers and based on the principle of reason inherited from the Enlightenment, privileges human freedom. Reason is freedom. Kant conjectured that with reason man "discovered in himself a power of choosing for himself a way of life, of not being bound without alternative to a single way, like the ani-

やれるようになりたいからだ。何か、基本的なことを。根本的なことを。昔の人がやっていたようなことを。電気がなくても、できることを。専門家を呼ばなくてもいいことを。針仕事——女性のやることだって？ 船員とか、ハンターとか、さもなければ、独力で生きなければならぬ人にそう言ってみたらどうか。ぼくは多くの実際的なことを習わないでできてしまった。エンジンや車、機械類を直せないし、前にはやっていた木工や大工仕事は、都会生活と共にさびついでしまった。何もできないまま生きなくてはならないとしたら、困った事態になることは目に見えている。だれかがもう一度教えてくれるよう望むしかない。しかし、ぼくは何かができるようになりたいのだ。そうだった、ぼくはこのズボンが縫えるんじゃないか。

今日、いろいろなことを行う方法が本当のところわかっていないのではないかと、という不安な気持ちをめぐいきれない。でも、ぼく同様多くの人がその不安を抱いているとは、あるいは気付いているとは思えない。社会一般というよりは、個人としての話なのだけれども。ぼくらは、若い人たちに大切なことを教えてはいないのだ。役にたつことや、どこにいても行えること、世界を結びつけること、満足感を与えるようなことなどを教えてはいないのだ。ぼくらは、自分の子供たちも含め、皆自分だけの小さな決まりきった仕事をするだけのミクロ的専門家の世界に閉じこもっている。だから、完全な消費者となり、独自には何もできないようになるのだ。専門家を呼べ——そんなものは捨ててしまえ——新しいのを買えばよい。

こうして、ぼくらは人生に深い不安感を抱くようになる。あまり奥深く詮索したくない不安感だ。あまりにも行きすぎたバランス・システムについて、熱力学第二の法則の容赦ない警告、又はもっと身近な常識のそれに賭けてみたい。ぼくらは、内心変化を恐れる人間として、うまれながらに保守的——悪い、貪欲な意味において——になっている。自力で何かを達成できないのでは、と恐れている。真の自立が意味

することを恐れている。

時を繕う。今日ではほとんどすたれた考えだが、今を生きるぼくらにはどんな意味をもっているだろうか。確かに、物質主義者の社会にとっては、脅威だ。お膳立てされた流行り廃りと、専門志向の社会にとっては脅威だ。ぼくらが皆、高価で寿命の短い流行の商品を買うのをやめ、また繕いものを始めたら、ぼくらが考えている経済は、大幅に変わらなければならないだろう。繕いもの世界？ これこそ、本当に脅威だ。我らが誇る商工会議所のお偉方なら、迷わずやっきとなって根こそぎにしようとするにちがいない。まさに治安妨害。繕いもの社会だって？ ばかっている。異端だし、危険きわまりない。原住民や伝統を生きる人々の、もっとゆったりとした長続きする方法と同様に、ばかっている、しかも危険なのだ。

このズボンを縫い直していると、このように語りかけてくるものがある。本質と、そして他の多くの、ぼくが価値を見いだしていることへの可能性について語るのだ。ぼくに語りかけ、ぼくがより良い人生を生きたいと思うような方法をそとと教えてくれるのだ。一インチずつぼくは縫い続ける。急いでしまうこともある。相変わらず針先でちくりとやられる。針目を見れば、ぼくの心と手がどこにあったかがわかる。ふぞろいな針目もあれば、きれいにそろい、布地とぴたりと合った一定のリズムが感じられるものもある。こうしている時に、ぼくは真理を学び実行するのだ。布地や針、そして自分の手に没頭する時もある。これらのものが、一つに統合され始めているように思える時もある。縫っていることさえ忘れてしまうこともある。

ぼくは針仕事の貴重な教えに——時々針で刺されながら——そしてぼく自身を繕うことに、感謝の念を持ち続けたいと思う。つまるところ、ぼく自身も丹精込めた生き方をしたいのだと思う。

※「時を繕う」をニューズレター第4号に掲載するに当たっては、紙幅の関係で、著者ブルース・アレン氏の了解を得て、3分の1ほどを削らせて頂きました。

mals." Although the infinity of free choices open to human beings seems an abyss at first, most humans develop into moral creatures with a sense of decency (*Sittsamkeit*) who know right from wrong, and who struggle towards perfection as a species.

There are many obvious problems with this Enlightenment grand narrative. Even so, it seeks to safeguard a *critical agency* (in the individual person) which can contest a totality--the State, or any dominant class or group value. Luc Ferry is worried that there won't be such a critical agency in the new ecological order. But let's turn things around using the same phraseology. Isn't ecology a critical agency which seeks to contest the order of reason taken as a totality?

In many cultures public space is based on morality and personal values, not only scientific truth. In this regard there is freedom for critical and eccentric behavior in public space, although this freedom varies from culture to culture. This difference between cultures suggests that there is as yet no universal order, no absolute truth. But on the other hand, a philosopher like Luc Ferry would not hesitate to invoke the universal validity of human rights. It is animal and tree rights that he resists universalizing.

Science and Human Values

Presently, many people consider it distasteful to smoke. They know it is harmful. It is illegal in specific places, such as certain restaurants and aircraft. But it is not *universally condemned*--not yet. For good health, as Luc Ferry says, is not an absolute value for everyone or in all circumstances. That is because our way of thinking about and judging human behavior is not strictly governed by science and we are free to decide whether to smoke or not according to our values. Morality is not based on the facts of natural science. So even though everyone knows it is true that smoking is unhealthy, not everyone sees it as *evil*.

It follows that for some people a pleasurable life has a higher value than life without pleasure. Smoking is an artifice, a stylized gesture and pleasure, argues a recent book published by Duke University Press titled *Cigarettes Are Sublime*. The human being has given herself the right to deviate from nature, that is, to do things which do not follow the logic of the natural kingdom. A pond may seem placid, but that does not mean a writer has to write clearly about it; it may provoke her to narrate her own inner turbidity. Art, philosophy, literary criticism are activities which may or may not follow the cues of nature.

Overpopulation is a biological fact, remarks Luc Ferry, but this does not justify a former member of the Green Party's suggestion to stem "at the source the overproduction of chil-

dren in the third world." It does not justify a dream of another member of the Greens, of a "global government that can subjugate populations in order to reduce pollution and alter desires and behaviors through psychological manipulation." Luc Ferry goes on to voice his concern about what could happen if our thinking tries to legislate itself from the *point of view of nonhumans*:

...when we get to the point of arguing that the ideal number of humans, *from the point of view of nonhumans*, would be 500 million (James Lovelock), or 100 million (Arne Ness), I would like to know how one plans to realize this highly philanthropic objective. For, here too, the dreams of radical ecologists often turn to nightmares, as in the case of the death program evoked by William Aiken and published in an anthology that enjoys an excellent reputation: "In fact, massive human die backs would be good. Is it our duty to cause them? Is it our species' duty, relative to the whole, to eliminate 90 percent of our numbers?" (75)

The anthology which enjoys an excellent reputation is *Earthbound: New Introductory Essays in Environmental Ethics*, edited by Tom Regan and published in 1984. But Luc Ferry says that in the anthology is Aiken's endorsement of a *massive human die back*. Certain people would be excluded from species survival under this tyranny of good intentions.

Ecofeminism and Existential Feminism

Since the Enlightenment, human beings have given themselves the right to command themselves instead of being commanded by natural law. In Kant's words, reason is "man's release from the womb of nature." This means that human freedom transcends the laws of the animal kingdom. But according to ecofeminists this kind of transcendence is a catastrophic development: men have disengaged themselves from nature with their science and technology. Ecofeminism seeks to transgress or reverse this development by privileging women's continuity with biological nature.

Luc Ferry cites Mary O'Brien's *The Politics of Reproduction* to demonstrate how feminism articulates a "reproductive conscience" which confirms women's unity with nature. This kind of feminism poses a potential problem for Luc Ferry, as we see in the following passage:

To assert that women are more "natural" than men is to deny their freedom, thus their full and whole place within humanity. That the ecofeminists hate Western

civilization and modernity is their business. That they wish to find natural justifications for this hatred means playing the game of biological determinism, of which all women will suffer the consequences if it is taken seriously. (126)

This type of ecofeminism which upholds biological determinism contrasts most starkly, says Luc Ferry, with the existential feminism of Simone de Beauvoir and others. Existentialists don't have the comfort of falling back on their "nature"; the only thing behind them is an abyss of anxious freedom. One does not inherit an identity: one makes it, like one writes a novel. Responsibility is the *effort of creative becoming*--becoming woman, becoming ecological. Such an existential orientation would presumably help radical feminists avoid being trapped by the stereotypes and expectations which inevitably--in spite of the best intentions--accrue to natural or biological concepts of self. Likewise, philosophers who still uphold reason can strive to become ecological. In this way the gap between ecocentrism and anthropocentrism can be crossed.

More Responsibility

Luc Ferry's turn to existential feminism is a positive moment in his critique of radical ecology. He is seeking to formulate a notion of democratic ecology, and thus is sensitive regarding anything that has historically constrained human choice and freedom. He thinks that a cleaner, more pristine earth would just not be worth it if human dignity and quality of life were sacrificed. The concerns of the ecological movement are so crucial and portentous that its writers and activists need to be especially vigilant about assuming potentially dangerous or misleading concepts, such as those associated with biology.

Yet Luc Ferry's privileging of human rights over animal rights and the rights of the inanimate is not itself something that can go unquestioned about its assumptions, and may har-

bor equal dangers. In this regard Jacques Derrida has insisted that we move beyond our concept of rights based on human freedom to one that takes on *more responsibility* not only for living humans, but the living in general, including the creatures that we "sacrifice" to our diet. Our modern sense of freedom upholds subjective freedom, the freedom of reason. This sense derives from Kant's famous motto for the Enlightenment: "Have courage to use your own reason!" But Derrida thinks that the time has come for a responsibility that is wider than reason and not regulated by it.

Creative Engagements

It seems apparent that Luc Ferry and like-minded philosophers need to think things through as creatively as possible to try to imagine a just world in which animal and tree rights are equal with those of humans. All the more reason to keep reading the *nature writers*, who are not as constrained by disciplinary or ideological assumptions and are often more concretely engaged in worldbound situations. For what if Enlightenment assumptions are wrong and disengaging our humanity from nature *reduces*, not increases, our humanity? What if, in getting closer to nature, we increase our humanity? Thoreau cited by Loren Eisely: "If you would learn the secrets of nature, you must practice more humanity than others."

References:

- Derrida, Jacques. "Eating Well, or the Calculation of the Subject," in *Who Comes After The Subject?*, edited by E. Cadava, P. Connor, J.-Luc Nancy. New York: Routledge, 1991.
- Eisely, Loren. "Strangeness in the Proportion," in *The Night Country*. New York: Charles Scribner's Sons, 1971.
- Luc Ferry, *The New Ecological Order*. Chicago: University of Chicago Press, 1995.
- Kant, Immanuel. "What Is Enlightenment?" and "Conjectural Beginning of Human History," in *Kant on History*. Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1963.

●鈴木貞美編『大正生命主義と現代』（河出書房新社）

昨年3月に刊行された本でいささかご紹介が遅れたが、文学と環境の問題に重要な視点をもたらす日本文学の側からのアプローチの一つとして注目したい本。大正時代にほぼ重なる1905年～1923年の間の時期、「『生命』の語が氾濫し、『生命』がスーパー・コンセプトになっていた時代が、かつての日本にもあった」という点に着目してそれを「大正生命主義」と名づけ、この概念装置を使って時代の思想・文化状況を観察する新たな手がかりを導入しようとしている。各論考にも新しい視点からの日本近代文学の相貌が提示され、日本のネイチャーライティング研究を進める上でも重要な文献となる。なお、続編と

して鈴木貞美編『〈生命〉で読む20世紀日本文芸』（『国文学解釈と鑑賞』別冊、至文堂、1996年）があり、こちらも示唆に富む。また、鈴木貞美著『「生命」で読む日本近代』（日本放送出版協会）もあわせて読みたい。

エコクリティシズム：語り、価値、コミュニケーション、接触
 スコット・スロヴィック／近江満里子 + 佐藤昌保 + 柳原優子 + 平塚博子 訳

ネイチャーライティングの入門編として、私は「エコクリティシズム」ということばを、次のように定義している。

エコクリティシズムとは、
 学問的アプローチとしてネイチャーライティングを研究すること、
 逆に言えば、あらゆる文学形において、たとえば一見人間社会以外を考慮に入れていないようなものも含めて、
 生態学的意味、及び人間と自然との関係を追求することを意味している。

また、私はエコクリティシズムに関心を持つ他の文学研究者に対して、以下の四つのポイントを強調することにしてはいる。

1、ストーリーテリング（語り）

環境批評家 (ecocritics) は、
 文学分析のために物語 (stories) を語るべきである。
 我々は、文学研究を何の香りも味もしない、実際の経験を欠いた無味乾燥な、過度に知的なゲームにしてはならない。
 研究を通じて、自分自身のことを語り、
 その結果どのようにしてこの世界との絆が、文学作品への反応を形づくるのかを示さなければならない。

2、価値観

ネイチャーライティングの代表的研究者であるグレン・ラブは、
 "Revaluing Nature: Toward an Ecological Criticism" (*Western American Literature* Nov. '90) 11
 「学者ぶったかまえや中立性」には用がないと、主張していると思われる。
 一番基本的なレベルにおいて、学問としての文学及び文学そのものは、人間の価値観と態度に結び付いている。
 文学表現が、世界で何が重要であり意味深いかということ
 どのように読者に決定させるかを、我々は批評家及び文学の教師として考える必要がある。
 我々は、価値観の問題を避けて通ることはできない。
 これは、文学（又、哲学や宗教）研究の主要領域であるし、
 なぜ人文科学が大学の環境学において、重要な位置を占めているか、ということの理由の一つでもある。

3、コミュニケーション

言葉と紙を無駄にしてはいけない、言うべきことがある場合は、明確にかつ直接言うべきである。
 つまり相手にそれを伝えるのだ。
 多くの文学研究は判読不能なくならないものだ。
 それは現実の読者を想定して書かれたものではない。
 とりわけ、環境批評家は明確であると同時に優雅な言語を使うよう心掛けるべきである。

4、接触

一年前、私は木下教授、上岡教授と共に、松山市郊外の山の中に、『わら一本の革命』（1975）の著者である84歳のお百姓哲学者の福岡正信氏を訪ねる旅に出た。そして、この旅の間ずっと考えていたことを尋ねてみた。「私たちの自然理解に、大学が貢献することが可能でしょうか。我々文学者についてどう思われるのでしょうか。」すると福岡さんからこのような答えが返ってきた。「鳥が鳴くのをお聞きなさい。」皆は話すのをやめた。小屋の外では鶯が鳴いていた。そして福岡さんの助手が囁いた。「先生は、もしあなたが素朴な心を持てば、そのことは可能だとおっしゃっています。」つまり、もし、私たち大学に働く者たちが、自然そのものに対する注意を怠らなかつたら、そして講義や理論やテキストや研究室の中に自分を見失うことがなかったなら、自然に対する社会の理解や評価に貢献することは出来るだろう、ということなのである。環境批評家は、文学や仲間同士との接触だけでなく、物理的な世界との接触を持つことが必要である、という強い警告の表れなのである。これらの考えは新宿の「千草」という居酒屋でのネイチャーライティングの討論を思い出す度に、私の頭をよぎる。と、いうのも、このバーの中では自然界が、ただ一つの抽象概念になってしまい、紫煙と窓のない暗闇の中に埋没してしまうからなのだ。私たちは文学者として真剣であればあるほど、現実世界との接触を持つことが必要なのだ。

郊外にて

近江 満里子



ノリコちゃんは、女子大出身の才媛だ。アンティーク・ドールのように白い肌と、華奢なスタイルのお嬢さんである。その彼女が、山登りになると、20キロのリュックを背負ってしまうというのだから、人は見かけによらない。

今回の山行きも、たしかノリコちゃんが山の話をしていて、ブルースがのってきたのではなかったか。だが、問題はほかのメンバーである。うかない。ナオミさん曰く、とにかく山登りは苦手だから、あんまり……。ヒロコちゃんは、麓でカレーを作って待っているから、みんなで登ってきて、と最初からお手軽コースをねらっている。ユーコさんも、山ねえ……といった調子。どうも、カレー班ばかり充実しそうな気配だ。これが自然愛好家（のはず）の面々のせりふであろうか。

一方、はりきっているのは、ブルース。山と聞いただけで、もう立ち上がりかける。だから、ノリコちゃんの話に二つ返事であったことは言うまでもない。

さて、だれがプランを立てるか。結局、以前丹沢の近くに住んでいた私が、計画することになる。役得！とばかり、私の好きな山里散策コースを選ぶ。大山の東側の丘陵地帯だ。刈り入れが終わった田圃の畦道や、みかんのなり始めた丘など、慣れ親しんできた光景が頭に浮かぶ。

そして1995年11月12日の朝。小田急線伊勢原駅には、6名の顔がそろった。もう足踏みしているブルース。ニューフェースのレイコちゃん。社会人のアキエちゃん。顔に「修論どうしよう。」とかいてあるヒロコちゃん。3日前にも山に行ったノリコちゃん。そして私だ。特別出演の高田先生は、急に御都合が悪くなられて、残念。ナオミさん、ユーコさんとミホちゃんも来られず、運が悪い。

終点の日向薬師でバスを降りる。薬師様へ向かう坂道を歩きだすと、まもなく土手一面にヒガンバナの葉が濃緑色にかたまって茂っているのに気がつく。9月の末に来たら、さぞ花がみごとだったろう。曲がりくねった狭い道に農家が何軒か向かい合っている。軒下には干し柿がぶらさがり、昔懐かしい。里芋の茎が庭に干してある。菊に混じって、まだオシロイバナが咲き残っているのがおもしろい。山と畑の間で、自然と共存している日々がうかがえて、なんともうらやましい。

茅葺きの御堂の裏にある、梅林兼雑木林が日向山だ。たった404メートルじゃないか、と思ったのは最初だけで、登り始めるとけっこうきつい。滑りやすい所が何カ所もあって、つい視線が下にばかり向いてしまう。と、それまでいつもにこにこしていて、発言を控えていたブルースが、こう教えてくれる。「一カ所ばかり見ていないで、両腕を広げたくらいまで広く見るようにしてごらん。」

人間の視野は、普通は45度位の角度しかないような。ところが、意識して広く見ようとすると、これが難しい。思わず両目

をいっぱい開いて、緊張してしまう。何よりも、足元から視線をそらすのが怖い。自動車教習所で、突然路上練習に入ったような感じだ。どうやら、この「第4段階教習」は、ゆっくり時間をかけないとだめらしい。

慣れない足どりながら、日向山の頂上まではそう苦勞せずにやってきた。しかし、問題はその後である。普段、研究目標だの、テーマ設定だの、そのなことばかり考えている人間が、突然、途中まで来たら、時間はたっぷり、でも行くあてが決まらず、という妙な状況に直面したのだ。第一、日向山から先の道と、地図が全然一致しない。だが、常日頃、権威ある原典を、と頭にたたきこまれている我らとしては、当然国土地理院二万五千分の一の地図、厚木の巻ののっとなって行動したい。だから、ここでもその地図と、丹沢ガイドの地図をくらべながら相談を始める。どっちみち300—400メートルの高さの地域を歩いているのだから、遭難する恐れはまずないだろう、とみんな考え、尾根に向かうコースをとることにする。

まもなく、無事梅の木尾根とやらに出たので、ながめもいいことだし、全員一致で昼食をとることにする。山での食事は最高に楽しい。前にハイキングにこっていた頃は、携帯用のコンロを持参し、山頂でインスタント味噌汁、カップ・ヌードル、カップ焼きそばなど、いろいろ試したものだ。とにかく、熱い湯気がたっているだけで、感動してしまう。今回は、ポットの湯をコーン・スープの素に注ぐだけだが、それだけでもサンドイッチがひきたってくる。

それぞれお弁当をかかえこんで、みんな顔がほころんでいる。登る時にかいた汗も、ほどよくおさまった。これぞ、至福の時だ。

去年、秋川渓谷にハイキングに行った時は、すさまじかった。真夏の炎天下。メシはまだか—スコットのクラスの連中が、それしか考えず、やっとの思いで歩いていた。急に日向に放り出されたタヌキのようなもので、ひざしがまぶしくてしかたがない。渓谷を散策といっても、かなりの距離を車道を歩かねばならないことがわかり、頭上の太陽と、言い出しっぺのイワマサさんを思わず恨む。

やっとお昼にしよう、ということになり、どれくらいほっとしたことか。ところが、我らが若き恩師スコットは、それまでは学生の言うままに従ってきたのが、先頭をきって河原への崖を下り始めたのである。それも、わざわざ歩きにくい所、渡りにくい流れを選んでいるとしか思えない。皆、だんだん無口になる。それに反して、スコット一人、目が輝き出す。少年のように喜々として学生の写真をとりまくる。

いよいよお弁当というハイライトをむかえて、驚いた。スコットの選んだ場所は、なんと真夏の太陽ギンギンの水際ではないか。全員の顔にウッソー！と絶望の色が走る。が、これをテキサス風というのだろうか。スコットは、流れの中にある岩に腰掛け、素足を水に浸しながら、サンドイッチをパクつき始めたのだ。あきれける学生を尻目に、スナック菓子の袋なんぞやぶっている。しょうがなく、学生連中もおっかなびっくり裸足になって食べ始める。

しかし、おなかも気持ちもおさまってみると、川の水にくるぶしまでつかっているだけで、結構暑さがしのげる、ということに気がついたのだ。気化熱だかなんだか、昔習ったことは

すっかり忘れていたのに、身体の方が、その心地よさを思い出す。「な、わかったらう？」と、スコットの目が笑っている。元気を取り戻した若い学生たちに混じって、そう年の違わない大学教授が、石投を競い始めた。

付近の鳥の声もかき消す勢いで、お嬢さんたちのおしゃべりが続いている。目の前にはお菓子の放出物資もわんさどあるし。あまり甘い物には執着心がないように見えるブルースも、今日は女性軍の後ろから、しきりにチョコレートに手をのばしている。

もう地図にはこだわらず、道標のみを頼りに、行きたい方へと気楽に歩き出す。その選択は、実にラッキーだった。というのは、まもなく土の柔らかい上り坂のわきに、シカの足跡を見つけたからだ。たまたま、そこだけ落ち葉がつもっていなかったためだろうか、先が割れた足跡がくっきりと土の上に残っている。人間以外の生き物が身近にいるのだ、と初めて実感がわいてくる。ここでは、私たちの方が侵入者なのだ。木々の間に、同じ色の体をとけ込ませて、シカがじっとこちらを見つめているような気がしてくる。

太陽の方角によって、気のせいか紅葉の色合いが違って見える。山は、普通午後になると雲がでることが多いが、今日はその逆だ。向いの山の斜面を見上げると、木々の葉が陽を受けて輝いている。杉林は、同じ濃緑色の連なり。その合間に雑木林が所々鮮やかな赤や黄を浮き上がらせている。

もう麓に近い、車道下の河原では、大勢の人たちがグループになって火を囲んでいる。サッカーボールを蹴っている子供たちのかたわらで、大人は皆真剣な表情で鍋の中をのぞき込む。芋煮会だろうか。だいぶ日も傾いてきて、火が懐かしい。鍋の中が恋しい。煙が細く空に立ち上っている。ここの柿は、野生に近いのか、小粒で色も淡い。朱というよりは、くすんだ黄色。青空に点々とアクセントをつけている。

無事下りてこられてよかった、とほっとする。予定とはまるで違うものとなったが、それなりになんとかうまくきりぬけてこられたと思う。それがなんとも嬉しい。というのは、去年のハイキングでは、最後になってとんでもないハプニングがおきたからだ。

秋川溪谷からバスに乗りこんでまもなく、アキエちゃんが見るみる具合が悪くなり、途中で降りて近所の民家へ転がり込んだのだ。日射病だった。冷や汗を浮き立たせて苦しんでいた彼女が、落ちついた寝息をたてるようになるまでの一時間がなん

と長く感じられたことか。

そんな事態を経験してみると、普段自然との交感なんて、偉そうに論文を書きながら、いざ郊外を歩いてみて、自分がどんな反応を示すかさえ、まるで見当もつかないでいたことに気づく。だれが日射病を起こしてもおかしくない。そんな状態で皆自分の体力の限界も知らずに、身近な自然に接したつもりでいたにすぎなかったのだ。

今回のハイキングで、行く前から消極的な人が多かったのは、実は去年の体験があまりにも過激だったからではないだろうか。ハプニングが恐い。歩き通せなかったら？そんな心配が妨げになっていたのだ。だから、明確かつ無理のない目的地と、綿密なスケジュール、そして各種の地図やガイドブックで厳重に身を固めていないと不安だったのだ。だから、首都圏の行楽地の山でさえ、あるがままに受け止めようとはしていなかったことが、わかってくる。自分で考えたとおりの自然に接しようとしていたのだ。

それが崩れ始めたのが、日向山の頂上で次に目指すあてが見つからず、その上地図と道標とがまったく違ってしまった時だった。しかし実はその時点から、本当の自然との接し方が始まったのではないだろうか。

ブルースのことばが、あらためて頭に浮かんでくる。「広く見るようにしてごらん。」私たちは、目の前の光景もそうだが、それ以前に、地図しか見ようとしていなかったのではないだろうか。一枚の紙だけに頼り、山全体、そして山の背後にある空、雲、太陽を身体で、心で感じようとはしていなかったのではないだろうか。シカの足跡を発見できたのは、もう地図は気にせず、好きなように歩こう、と決めたまさにその後だった。そのようにして、足跡が目に入るようになったのだ。

広く見る――なるほど、見ようとしているものを意識しだすと、目に力が入り、狭い範囲しか見えなくなる。自分も自然の一部として、見えてくるものを柔らかく素直に受けとめる――それが広く見る、ということなのではないだろうか。

しわになった国土地理院の地図を、もう一度ひろげて見る。相も変わらず、等高線や記号はピンとこない。でも、行く前と比べて、今は山の連なりや柿の実の色、鳥のさえずりやひんやりした空気を、この地図から感じることができる。川のせせらぎや、苔むした岩にあたる一条の光が、鮮やかによみがえってくるのだ。

ブルース・アレン氏より Nature Writing Reading Group へのお誘い

Started by Scott Slovic during his stay in 1993-4, a group of people interested in reading and discussing nature writing and related issues has been meeting in Tokyo. For the past year we have been meeting at Bruce Allen's house in Bunkyo-ku, or outside when the weather allows. Anyone interested in joining this informal but spirited group, give Bruce a call.

ASLE-Japan / 文学・環境学会について

代表 野田 研一

ASLE-Japan / 文学・環境学会（旧ASLE-Japan / 文学・環境研究会）は2年前の1994年5月、熊本大学を会場とする設立総会を以て出発しました。自然や環境の問題を自分たちのフィールドである文学の観点から検討してゆこうという動きが、英米文学研究者の間で徐々に広がり始め、アメリカで先行している同趣旨の研究団体ASLE-U.S.をモデルとして、準備段階を経て設立に到りました。ちょうどその前後、ASLE-U.S.の初代会長スコット・スロヴィック氏(Scott Slovic、現在ネヴァダ大学準教授、同大学人文・芸術系環境研究センター所長)がフルブライト教授として来日し、日本のいくつかの大学で「ネイチャーライティング」に関する刺激的な講義を行い、研究者・学生に強い印象を残すことになりました。ASLE-Japanの設立最大の原動力はスロヴィック氏の活動にあったともいえます。ASLE-Japanの会員は現在、正式登録を済ませておられる方が約85名です。多数を占めるのは英米文学研究者ですが、日本文学研究者、ジャーナリスト、作家、編集者、環境科学研究者、環境教育研究者、大学院生など多彩です。今後、ますます多分野の方々が参加されることを願っています。

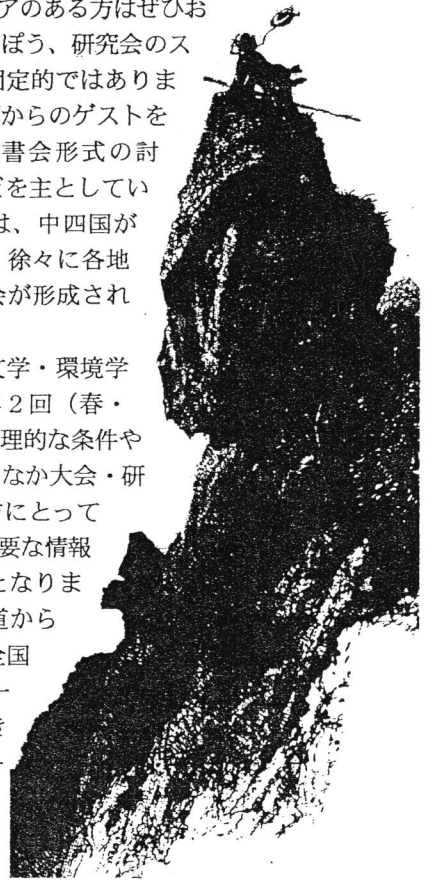
ASLE-Japanのキーワードの一つは〈ネイチャーライティング〉(Nature Writing)です。ネイチャーライティングという文学における新しいジャンルの登場が、文学と環境の関係をめぐる新しいアプローチをうながし、ASLE-Japanの設立の契機となったともいえます。しかし、その後、作品の系譜化や研究方法の理論化が進むにつれ、たんに自然や環境を主題化したノンフィクション文学だけでなく、小説、演劇、詩などを含みさまざまな文学ジャンルにおけるそうした側面への関心も強まり、それらを一括して〈環境文学〉(Environmental Literature)という枠組みで新たにとらえようとする動きも顕著になってきました。そしてこの観点から行う批評理論的アプローチを〈エコクリティシズム〉(Ecocriticism)という名称で呼び始めています。こうした一連の出来事は、これまででもっぱらアメリカの研究者の世界における出来事だったわけですが、ASLE-Japanの活動を中心として、日本でもこのような動きが始まっていることは皆さんご承知のとおりです。雑誌『ユリイカ』3月号の「特集ネイチャーライティング」は、現段階における最上の問題提起と解説を含んでいると思います。ご参照下さい。

さらに、ASLE-Japanはアメリカのネイチャーライティングのみならず、何よりも「日本のネイチャーライティング」の発掘作業に目を向けています。なぜ、「発掘」といわねばならないかといえば、〈ネイチャーライティング〉というジャンルがいわばアメリカ直輸入の概念であって、日本文学にそれが適用可能であるかどうか未知数であり、そのような観点からの研究はまだ手つかずであるからです。ASLE-Japanには昨年、「日本のネイチャーライティング研究分科会」が有志によって設立されました。これは前記のような課題を検討し、研究を推進してゆくためのグループです。アメリカ文学におけるネイチャーライティング研究が進むにつれて、アメリカではむしろネイチャーライティングの「国際化」という問題への関心が浮上し

つつあります。これは、アメリカ文学の枠内だけにとどまらず、国際的な規模でネイチャーライティングの存在と意義をとらえようとする試みです。日本のネイチャーライティング研究はその一翼を担うこととなります。従来、日本における外国文学研究はかならずしも日本文学研究にフィードバックされることが少なく、研究者も外国にしか目を向けて来ませんでした。その意味では奇妙に閉鎖的であったわけですが、ネイチャーライティングというジャンルの意義を考えれば考えるほど、これを日本文学の問題としてとらえ返すのは当然だといわねばなりません。分科会の研究が進み、研究会や大会で日本のネイチャーライティングが議論され、やがては本格的なネイチャーライティングの書き手が出現する。そんな未来を想定しています。また将来的には、そのほかにもさまざまな分科会が研究グループとして編成されることを願っています。思いつきですが、たとえば、〈エコフェミニズム〉、〈フィクションと環境〉、〈文学と環境教育〉、〈文学的風景論〉、etc..

ASLE-Japanの年間行事は10月の年次大会が最大のイベントですが、その前後に数回にわたる研究会（随時）を開催します。年次大会ではASLE-Japanの運営にかかわる総会と、文学と環境をめぐる研究発表を行います。年次大会の内容は研究発表のみならず、講演会やシンポジウム、ワークショップ、展示会など多彩なものにしてゆきたいと考えています。（アウトティングやネイチャーゲームを取り入れたこの会らしい趣向も欲しいところです。アイデアのある方はぜひお知らせ下さい。）いっぽう、研究会のスケジュールはあまり固定的ではありません。アメリカや外部からのゲストを招いての講演会や読書会形式の討論、分科会の議論などを主としています。また地区別では、中四国がもっとも活発ですが、徐々に各地域にこのような研究会が形成されるものと思われます。

『ASLE-Japan / 文学・環境学会Newsletter』は年2回（春・秋）刊行されます。地理的な条件や仕事の都合などでなかなか大会・研究会に参加できない方にとっては、これがもっとも重要な情報源であり、交歓の場となります。会員は北は北海道から南は沖縄まで、日本全国に散らばりなかなか一同に会することができません。『ASLE-Japan ニュースレター』はメンバーのさまざまな声を反映し、情報を



交換し合う役目を果たします。掲載記事は、ASLE-Japanの活動内容、決定・変更事項、出版情報、そして会員による寄稿（エッセイ、情報、告知）などです。ニュースレター編集室はつねに情報提供や寄稿をお待ちしています。また今後、会誌の発行も検討されています。より学術的な情報や論文が会誌に掲載されることになれば、ニュースレターの役割もおのずと変化することと思われます。

目を奪うほどではないにせよ、ネイチャーライティング関係の翻訳書がシリーズ化されて出版されたり、雑誌の特集が編まれたり、新聞記事に登場したりと、ネイチャーライティングを取り巻く環境は数年前に較べて格段に整ってきています。じっさい、ネイチャーライティングというカタカナ術語は日本でも文芸用語として定着したかに見えます（『現代用語の基礎知識

95年版』参照）。さらに今後も雑誌特集、研究論文集、翻訳、英語教科書などのかたちで関連出版が予定されているようです。それだけでなく、読賣新聞社主催のシンポジウム、日米環境文学シンポジウムといったイベントも継続的なものになる可能性が強くなってきました。〈文学は自然や環境とどうかかわるか〉をテーマとして発足したASLE-Japanが、すでにこのようなテーマをさまざまなかたちで追究してこられた方々のネットワーク化を果たし、その基盤に則ったかたちで、少しでも〈環境文学〉の研究に貢献できればと思います。まだまだ概念規定も方法論も定まらない面の多いいわば発展途上の研究分野ですが、それだけに多様な試みや実験が可能なのではないのでしょうか。またじっさいそれに値する可能性を秘めた分野だと思っています。

Environmental Literature: An International Handbookについて

山 里 勝 己

3月9日に青山学院大学で開催されました研究会で、ニューヨークのGarland社から刊行予定（1997）の*Environmental Literature: An International Handbook*（Patrick D. Murphy編）に関する話し合いが行われ、次のことが確認されました。

- 1 日本からの論文は、以下の4テーマでまとめる。
 - (1) Nature in Pre-modern Japanese Literature (4,000 words)
秋山健、Bruce Allen 他
 - (2) Nature in Modern Japanese Literature (4,000 words)
木下卓、外岡尚美、太田雅孝
 - (3) Nonfiction Nature Writing (3,000 words)
野田研一、大神田丈二、石井倫代、高田賢一、生田省吾、外岡尚美
 - (4) Conservation Movement and Literature (3,000 words)
高橋勤、岡島成行、赤嶺玲子、山里勝己
- 2 各論文はそれぞれのチーム・リーダー（秋山、木下、野田、高橋）が中心となってまとめる。
- 3 原稿締切は9月10日とする。

ASLE-Japanの「日本のネイチャーライティング」分科会の取り組みとなりますが、会員の皆様からのご協力を仰ぎながらまとめていきたいと考えております。取り上げるべき作品、問題点、作家などについてそれぞれの執筆責任者（チーム・リーダー）にご教示ください。

ASLE-Japan home pageについて

北海道大学の土永孝氏より「ASLE-Japan home pageを設けてみました。URLは<http://icarus.ilcs.hokudai.ac.jp/aslej/aslej.html>です。現在このページにはhome pageの趣旨説明の文章が置いてあるだけです。学会・研究会の案内、会員募集、syllabus、その他の報告など、会員やその他不特定多数の人々への安上がりな広報手段としてどれだけ有効か実験してみてもいいかと思いますが、いかがなものでしょうか。なお、春季一時的にサーバマシンのシステム更新のため運用を停止する予定です」という、インターネット上にASLE-Japan home page開設の提案がありました。まだ試行中のようですが、アクセスしてみてもいいかでしょうか。発信型の学会を目指す以上、home page開設は急務だと思われます。土永氏もしくは事務局にE-Mail等でご意見をお寄せ下さい。土永氏のアドレスはINET:tuti@lilim.ilcs.hokudai.ac.jp、事務局のアドレスは奥付に記載されています。

なお、名古屋大学の加藤貞通氏も本格的なhome pageを開設しており、『ユリイカ』特集号の内容紹介や長良川河口堰問題の報告も見られるようです。URLは<http://lang.nagoya-u.ac.jp/~kato/>です。

事務局ニュース

◎お願い

- 1) 新会計年度に入りました。1996年度会費—一般¥3000、学生¥2000—を同封の振替用紙にて納入して下さい。
- 2) 現在、事務局ではできるだけ広範な方々にニューズレターなど諸連絡ができるように、メイリングリストに基づいて書類をお送りしています。メイリングリストには現在、128名の方のお名前があります。そのうち、前年度から今年度にかけてちょうど80名の方が、正式登録されております。会員登録を希望される方は、至急手続きをお願いします。登録手続きはニューズレター末尾の用紙をお使い下さい。
- 3) 近く会員名簿を作成してお届けする予定です。氏名、住所、電話、勤務先の4項目を掲載しますが、公表を差し控えられたい事項がありましたら、ご連絡下さい。
- 4) 秋の札幌大会の総会で新役員人事について検討される予定です。新役員として仕事をしてみたいというご希望をお持ちの方は、早めに事務局（野田）までご連絡下さい。役員は2年任期です。ただし、役員選出に当たっては、地域別分布なども考慮しておりますので、かならずしもご希望に沿えない場合もあります。ご了承下さい。役員の仕事については本ニューズレター1ページ目をご覧ください。

'96年秋の総会で新役員人事を行わなければなりません。そこで、役員として参加する意思をお持ちの方は事務局までお申し出下さい。皆様の積極的な参加を期待しています。

from editorial staff

■ニューズレターのNo.4をお届けします。発行するごとにページ数が増加し、今号はついに20ページになりました。これもASLE-Japanが発展した結果であって、まだ感慨にふけるほど歴史を積み重ねているわけではありませんが、忙しい中を投稿して下さい、翻訳をして下さったり、編集に協力して下さい、ありがとうございました。率直に喜びたいと思います。とくに近江満里子さんには校正の段階でお手伝を頂き感謝の言葉もありません。今後とも皆さんの積極的な投稿を期待するとともに、編集に協力して頂ければと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。■最近のニュースでもっとも印象に残り、考えさせられたのは、あのユナ・ポマーの逮捕劇でした。彼の荒野での生活がソローの系譜に連なるアメリカのネイチャーライターの見事な陰画になっているように思え

たからです。文明批判、社会批判が郵便爆弾に短絡するなど問題外で、犯人の個人的資質の問題、狂気を過大評価するつもりはありませんが、事件に「荒野」が介在し、「隠遁生活」があったことを考えると、ネイチャーライティングはあるいはこの事件で大きな難題を抱えてしまったのかもしれませんが。荒野に自由の最後の砦を見ていたエドワード・アビーが生きていたらどのような意見を述べたでしょうか。また、現在荒野に住み世界に向けて表現しているネイチャーライターたちはこの問題にどのように応えるのでしょうか。■最後にお問い合わせがあります。ニューズレター編集に協力頂ける方、あるいはDesk Top Publishingに関心のある方はご連絡下さい。ニューズレターはマッキントッシュ上でPageMakerというソフトを使い制作しています。(J)



ASLE-Japan
文学・環境学会

NO.4

1996年4月

【発行】

ASLE-Japan / 文学・環境学会
事務局 金沢大学教育学部英語研究室
代表 野田 研一
〒920-11 金沢市角間町

【編集】

編集委員 大神田文二 / 石井 倫代
ニューズレター編集室

年 月 日

ASLE-J / 文学・環境学会

事務局：金沢大学教育学部英語研究室
野田 研一

〒920-11 金沢市角間町

Tel. : 0762-64-5524 Fax : 0762-34-4103